

【資料】

看護学臨地実習におけるペア受け持ち実習の 効果と課題に関する文献研究

Literature Study on the Effectiveness and Challenges of Paired Practice in Clinical Nursing Practice

山崎 歩^{1),2)}, 金山 俊介²⁾, 竹村 淳子³⁾, 倉橋 理香³⁾Ayumi Yamasaki^{1),2)}, Syunsuke Kanayama²⁾, Junko Takemura³⁾, Rika Kurahashi³⁾

キーワード：ペア受け持ち実習，看護学臨地実習，文献研究

Key Words : paired practice, clinical nursing practicum, literature study

I. はじめに

少子高齢化の加速とともに、医療の高度化や在院日数の短縮化、それに伴う医療提供体制や地域包括ケアシステム構築等により、看護職者の役割や活動場所は多様化してきている。そのような社会背景のなかで、2017年大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会において「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が策定され、看護者に、様々な場面で人々の身体状況を観察・判断し、状況に応じた適切な対応ができる看護実践能力が求められていることが明示された（文部科学省，2017）。また、2002年に示された看護学教育の在り方に関する検討会報告において、看護実践能力を培うなかで看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるための臨地実習は不可欠な過程であると位置付けられている。さらに、臨地実習指導に対する大学としての責任体制を構築すべきであるとも明示されている（文部科学省，2002）。

看護実践能力を培うために必要と位置付けられている臨地実習において学生は、受け持ち患者との関

わりを通して命や人生について考えさせられる体験や、挨拶や報告、丁寧な言葉遣いという社会的スキルの習得がみられていた。また、看護ケアを提供できたこととともに患者からの感謝の言葉を通してモチベーションを高めていくという、臨地での体験を単に学習とだけでなく、人としての成長の機会とも捉えていた（石川他，2015）。また、精神看護学実習においては、対象を理解する重要性や、既習のコミュニケーション技術の応用といった知識の活用、個別性に応じたコミュニケーションや言動の裏側にある心理的アセスメントといった対象との関わりを通して学びを深めていたことも報告されていた（鎌田，2016）。以上の事から、臨地実習では習得した知識の確認と活用に留まらず、対象者を通して、医療者としての姿勢や視点を養う重要な機会であると考えられる。

一方で、看護基礎教育をめぐる課題として、人間関係の希薄化や生活体験の不足が進んでいること、コミュニケーション能力の不足があるとの指摘もあり、看護基礎教育においても、コミュニケーション能力の向上のための教育強化が必要であると報告さ

1) 元大阪医科薬科大学看護学部，2) 鳥取大学医学部，3) 大阪医科薬科大学看護学部

れている(厚生労働省, 2019)。人口や疾病構造の変化という社会状況のなかで、人と関わる看護職者を目指す学生が、臨地実習で学びを深め、看護実践能力を養うために、より効果的な臨地実習方法の工夫・検討が継続して必要となってくるものと考えられる。

そこで、今回、看護学臨地実習において学生2人で1人の患者を担当して実習を展開するペア受け持ち実習について、学生と指導者それぞれの立場で捉えた効果と課題、さらには、ペア受け持ち実習の際の指導者の工夫について文献より明らかにし、今後の臨地実習方法の検討の資料とすることを目的とする。

なお、本研究では、看護学領域の臨地実習において、学生2人で1人の患者を受け持つ形で進めていく実習のことをペア受け持ち実習とした(ペア受け持ち実習:以下、ペア実習とする)。

II. 目的

看護学臨地実習におけるペア実習において学生と指導者それぞれが捉えた効果と課題、ペア実習の際の指導者の工夫について文献より明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 文献検索方法

本研究においては、医療体制や教育背景の異なる海外文献は除き、国内文献のみを対象とした。分析文献は、検索期間を定めず、医学中央雑誌Web版およびメディカルオンラインを用いて検索した。検索の際の検索キーワードは、「臨地実習」「実習」「ペア受け持ち」「2人受け持ち」「ペア実習」「ピア・ラーニング」とし、原著論文に限定して検索した。その結果、ペア受け持ち3件、2人受け持ち0件、ペア実習16件の計19件が該当した。次に、タイトルと抄録から重複文献や学会抄録、特集を除いた、最終12件を分析対象文献とした。

2. 分析方法

分析方法は、対象文献を精読し、筆頭著者、研究テーマ、学術雑誌名、発行年、研究目的、研究対象者、実施領域、ペア実習における効果や課題、工夫

などをエクセル表の列トピックとしてマトリックス(Garrard, 2012)を用いて、文献を整理し、表にまとめた。

次に、研究対象者によって学生を対象者とした文献と、実習指導者を対象者とした文献にそれぞれ分類した。学生を対象者とした文献では、ペア実習における学生自身が捉えた効果と課題について、論文の結果に記述されている内容をそれぞれ整理し、類似した内容ごとにまとめていった。実習指導者では、指導者が捉えた実習上の効果と課題、工夫にも着目して分析を実施し、各文献の類似する内容ごとにまとめていった。

IV. 結果

1. 分析対象文献の概要(表1)

分析対象12文献のうち9文献が学生を研究対象とした文献であり(No.1~9)、残りの3文献が、実習指導者・教員を対象とした文献であった(No.10~12)。実習指導者を対象とした3文献のうち1文献は、ペア実習に実習指導マニュアルを導入・活用したことによる指導上の効果を評価した内容であった(No.12)。

次に、ペア実習を実践した実習を領域別にみると12文献のうち8文献は、小児看護実習であった(No.3, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12)。残りの4文献は、基礎看護学実習(文献No.9)、母性看護学実習(No.1)老年看護学実習(No.4)、成人、母性、小児看護学実習での各実習での実施した経験のある学生を対象とした文献(No.2)であった。

全分析対象文献12文献中の7文献は、所属大学や共著者が重複する2大学でそれぞれ行われた研究文献であった。(No.6, 7, 8, 12およびNo.5, 10, 11)。また、分析対象文献の論文報告時期は、2002年に初めてペア実習に関する論文が発表され、なかでも2018~2021年に発表されたものが8本であった。

2. 学生が捉えたペア実習がもたらす効果(表2)

学生を対象とした文献を分析した結果、学生が捉えたペア実習がもたらす効果として、〔検討を重ねることでケアの質が向上する〕〔対象理解のための知識の深まりと視点の広がり〕〔学習に対するモチ

表1 小児看護学臨床実習におけるペア受け持ち実習 分析文献一覧

文献No	著者	テーマ(年度)	雑誌名・巻・号・ページ	研究対象者	ペア実習実施領域
1	伊藤良子	母性看護学実習における学生自己評価の変化に関する一考察—教育マップ作成と利用・産褥期ペア実習を導入して—(2002)	京都市立看護短期大学 紀要, 第27号, 87-93.	学生	母性看護学実習
2	平山綾蘭, 市川英加, 長田貴子, 押領司民	ペア実習の人間関係と実習満足度との関係 (2012)	第42回日本看護学会 論文集看護教育 46-48.	学生	小児看護学,成人看護学 母性看護学各実習
3	二宮恵美	小児看護学実習においてペア実習を行った学生の思い—プラスの思いとマイナスの思いについて— (2014)	第44回日本看護学会 論文集小児看護 174-177.	学生	小児看護学実習
4	温水理佳, 松波美紀, 野中恵美	老年看護学実習における学生のペア実習の体験 (2015)	看護教育研究会誌 第7巻2号, 52-53.	学生	老年看護学実習
5	佐藤朝美, 小林三千代, 堀田昇吾	ピア・ラーニングを活用した“ペア受持ち制”小児看護学 実習における学生の体験(2018)	日本小児看護学会誌 27巻, 73-82.	学生	小児看護学実習 ※
6	林亮, 齋藤麻子, 石井くみ子, 川口千鶴, 西田みゆき	小児看護学実習におけるペア実習に対する学生の 評価(2018)	順天堂大学保健看護研究 6巻, 34-41.	学生	小児看護学実習 ※※
7	林亮, 齋藤麻子, 内野恵子, 石井くみ子, 川口千鶴	小児看護学実習におけるペア実習に対する学生の感じ るメリット・デメリット～実習時期による違い～ (2019)	順天堂大学保健看護研究 7巻, 24-31.	学生	小児看護学実習 ※※
8	古屋千晶, 西田みゆき, 川口千鶴	小児看護学実習におけるペア実習について学生が認識 した利点と欠点(2019)	順天堂大学保健看護研究 23巻, 32-40.	学生	小児看護学実習 ※※
9	北田素子, 笹川仁美, 榊島稔, 星野聡子, 館野和子, 齋藤やよい	リフレクションの記録内容の比較分析からみた基礎看護 学実習におけるペアでの受持ち実習の学習効果(2021)	城西国際大学紀要 29巻8号, 1-16.	学生	基礎看護学
10	佐藤朝美, 小林三千代, 堀田昇吾	“ペア受持ち制”小児看護学実習における臨床実習指導 者の認識(2019)	看護教育研究会誌 第11巻1号, 57-65.	指導者	小児看護学実習 ※
11	佐藤朝美, 堀田昇吾	ピア・ラーニングを活用した「ペア受持ち制」小児看護学 実習指導者の視点(2019)	横浜看護学雑誌 第12巻1号, 36-41.	指導者	小児看護学 ※
12	古屋千晶, 西田みゆき, 齋藤麻子, 林亮, 込山洋美	小児看護学実習における指導マニュアルを活用したペア 実習指導の実際(2021)	医療看護研究, 28巻, 86-95	指導者	小児看護学 ※※

実習領域の※および※※：同一所属大学あるいは同一著者

表2 学生が捉えたペア受持ち実習がもたらす効果

テーマ	内容	該当文献番号
学習効果	[検討を重ねることでケアの質が向上する]	③⑤⑥⑦⑧⑨
	[対象理解のための知識の深まりと視点の広がり]	①③④⑤⑥⑧
心理的効果	[学習に対するモチベーションの向上]	③⑥⑦
	[実習に臨む精神的負担の軽減と安心感]	②③⑤⑦⑧
副次的効果	[グループ内での関係性の深まり]	⑦⑧
	[指導者・教員との関係性が築きやすい]	⑧

ベーションの向上] [実習に臨む精神的負担の軽減と安心感] [グループ内での関係性の深まり] [指導者・教員との関係性が築きやすい] の6つの効果が示された。6つの効果は、『学習効果』『心理的効果』『副次的効果』の3つに大きく大別された。

1) 学習効果

ペアで実習を行うことで、[検討を重ねることでケアの質が向上する] [対象理解のための知識の深まりと視点の広がり] の2つの学習効果が示された。

[検討を重ねることでケアの質が向上する] では、ペア学生の患者との関わり方を見てコミュニケーション方法を学んでいたことが報告されていた (No.3, 5, 6, 7, 8, 9)。また、援助を分担したため短時間で実施できたことや2人で相談したアイデアを活かしてケアのためのツールが作成できたといった事前の打ち合わせやケアの検討により、より良いケアに繋がっていた (No.3)。小児病棟でのペア実習では、学生相互に訪室することを実践することや、どちらかが患児に付き添うこと、ケアの際には対象の子どもを一方の学生があやすことをするなど、対象者の負担や苦痛軽減のための支援を話し合うことを行っていた (No.5)。看護技術では、患者の負担を軽減するために役割分担することを検討し、補い合いながら看護実践をしていた (No.7)。また、役割分担することで実施者の学生がケアに集中でき、それによって介助者の学生の思考や振りかえりが深まり、結果、ケアの質が向上することに繋がることが示されていた (No.6)。さらに、看護技術実施の前には学生2人で実施技術を確認合ってから技術提供をすることで、より良い技術方法の確認にも繋がっていた (No.8)。

基礎看護学実習でのペア受け持ちと1人受け持ちでの実習後の学習効果を比較した研究では、「患者の特徴に合わせた援助が十分計画・実践できない」と記述したカテゴリーは、1人受け持ちで最も多く18名 (37.5%) 記述されていたが、ペア受け持ちでは3名 (15%) と、受け持ち方法によっての違いが報告されていた (No.9)。

[対象理解のための知識の深まりと視点の広がり] では、ペアの学生の患児への接し方を横で見て学び、

自己の関わりと比較して、関わり方を見つめなおすきっかけとしていた (No.5)。また、役割分担したなかで、主にケアを実施するペア学生をフォローしていく側の学生は、ケアのなかで患児や家族が表現したことに気が付きやすいという情報量や気付きの増加がみられ、それらの気付きが深い対象理解に繋がっていた (No.6)。

さらに、ペア間での意見交換を通して、自分では気付かない安全への配慮や不足する点を助言してもらえたといった、自己の考えが広がった点など、自己の視点や思考に留まらない学習内容の深まりを学生は効果として捉えていた (No.3)。また、知識を広げるための学習方法や学習への取り組みについてもペアから学ぶことができていた (No.8)。

老年看護学実習における研究では、ペア実習を行うことでのケアに対して学生は、「できることの幅が広がったように思う」「手厚くなった」との記述がみられていた (No.4)。また、産褥期臨地実習において1人で担当した年と、ペアで実施した年度のそれぞれの実習後の自己評価 (看護過程、子宮復古、産褥体操、授乳法など) 12項目での変化を比較した研究では、12項目中6項目でペア実習での学生の自己評価が上昇していた。上昇した6項目のうち産褥体操、会陰の清潔という教育的ケアに関与する2項目が有意に高い結果を示していた (No.1)。

2) 心理的効果

心理的効果として、[学習に対するモチベーションの向上] [実習に臨む精神的負担の軽減と安心感] が示されていた。

[学習に対するモチベーションの向上] では、2人で受け持つことで積極的に行動できることに繋がりが、また、できたことをペアの学生がほめてくれることでもモチベーションの向上に繋がっていた (No.3)。また、相手の良いところを参考にしてモチベーションを上げることや、相手に迷惑をかけないように予習する、ペアの学習状況を確認して励みにすることもみられていた (No.6)。さらに、ペア学生の実習姿勢が学べることで、自己の学習意欲の刺激になることやペアのなかでの目標を達成することで達成感を感じ、患者の反応をペア学生同士で

共有できる楽しさを通じて学習意欲が向上していた (No.7)。

〔実習に臨む精神的負担の軽減と安心感〕では、ペアの学生ができたことを誉めてくれ嬉しかったなど、心理的な支えとなっている (No.3) や、挫折指導になった際にも声をかけてもらえることで実習が継続でき、ペアの学生が患者に対応してくれることで、学生自身が落ち着いて考えられ、それが安心感や心強さにも繋がっていた (No.5)。

また、看護過程や患者との関わり方を相談できることで、心強さや (No.7, 8) 精神的な負担の軽減にも繋がっていた (No.5)。

実習中の人間関係と実習満足度を調査した研究においては、ペア学生との関係、患者との関係、実習指導者との関係、教員との関係の間に、弱い正の関係が認められていた (No.2)。

3) 副次的効果

実習を行う際の学生の周囲に位置する人々との関係のなかで、〔グループ内での関係性の深まり〕〔指導者・教員との関係性が築きやすい〕という学生が捉えた効果が示されていた。

ペア受け持ちを行うなかで、受け持ち患者のテーマや看護過程記録を発表する際には、状況をペア間で互いに補い合いながら説明することでグループ全体としての理解に繋がっていた。また、ペアの学生達は自分たちの受け持ち患者以外にも目を向けることができ、結果、グループ全体での学習機会が拡大していた (No.7)。さらに、ペアの学生との関係性が深められることでケアへの不安や疑問を話せ、それによってグループ全体でのディスカッションも増

加し、結果、メンバー間の仲も深まる (No.8) といった〔グループ内での関係性の深まり〕という効果も示されていた。

〔指導者・教員との関係性が築きやすい〕では、報告の際には、ペアの一方が、不足する情報を補いながら報告でき、また、緊張しがちな指導者や教員との関係性もペアで調整や会話ができることで、緊張が和らぎ、関係性が築きやすいといった状況がみられていた (No.8)

3. 学生が捉えたペア実習での課題 (表3)

学生を対象とした9文献を分析した結果、ペア実習のなかで学生が捉えた課題として、〔学生間関係性構築の難しさ〕〔主体性の低下〕〔比較されることを気にする〕〔患者に対する気遣い〕〔異なる考えや援助方法調整の難しさ〕〔学習機会が減少することへの懸念〕〔情報共有時間の確保が難しい〕の7つの課題が示された。

7つの課題は、大別すると『学生の内面に生じる課題』『実習形態から生じる課題』の2つに大別された。

1) 学生の内面に生じる課題

ペア実習の際、ペアの学生と関係性ができていないことや性格が把握しきれていないことから実習よりも、まずどのように関係性を深めていけばよいか戸惑っていた (No.7)。また、ペア学生へ意見を求めても言ってくれない、聞いても答えてくれない、意見が言いづらいことや (No.8)、学生本人が中心にケアを実施するなかで、ペア学生に対して自分が援助の中心になってしまうことへの心配や、反対に、自分がケアを実施したらスムーズにできたのではと

表3 学生が捉えたペア受持ち実習での課題

テーマ	内容	該当文献番号
学生の内面に生じる課題	〔学生間関係性構築の難しさ〕	③⑦⑧
	〔主体性の低下〕	③⑦⑧
	〔比較されることを気にする〕	③⑤⑥⑦⑧
実習形態から生じる課題	〔患者に対する気遣い〕	③⑥⑦
	〔異なる考えや援助方法調整の難しさ〕	③⑤⑥⑦
	〔学習機会が減少することへの懸念〕	③⑥⑦
	〔情報共有時間の確保が難しい〕	⑥⑦

いう場面があったと、ペア学生に対する不安や不満などを抱く (No.3) といった〔学生間の関係性構築の難しさ〕を課題として抱えていた。

さらに、何かあったら頼ってしまう (No.3) や、一緒にできることを考えると自分は見学ぐらいで大丈夫かとペアの学生に甘えて頼ってしまうことや (No.7)、相手の勢いに押され補助的役割に回る、相手の意見や思考に引っ張られる (No.8) といった主体性の発揮が阻害される〔主体性の低下〕が示されていた。

また、学生は、周囲からペアの学生と比較されると気かけ不安に思うことや (No.3, 5, 6, 7)、ペア学生の学習状況やアセスメントや記録物などの成果物、関わり方に関する状況が見えることで、自分が劣っている部分が気になる、劣等感を感じてしまうことも示されていた (No.6)。カンファレンスでの計画発表の際には、ペア学生が自分ない視点を発表することで周囲の学生からの評価とともに、教員からの評価を、より気にしていることなど (No.8)、〔比較されることを気にする〕ことが課題としてみられていた。

〔患者に対する気遣い〕とは、ペアの学生2人で訪室したら患児の表情が戸惑っていたことを感じ (No.3)、限られた病室スペースに学生2人と指導者や教員と入ることでの患児や家族への圧迫感を懸念してためらう (No.6, 7) といったペアでの実習が対象へ与える影響を課題としていた。

2) 実習形態から生じる課題

〔異なる考えや援助方法調整の難しさ〕では、患者に対してペアの学生間で、どんな看護がしたいか異なる点や、一方の学生の主張が強いときに、相手のペースに巻き込まれる。また、自分の意見が言えて相手の意見も取り入れるバランスの難しさ (No.5) を学生は感じていた。一方で、ペアの学生の意向に合わせられない際には、申し訳なく感じることも示されており、自分のこだわりや慣れた方法でケアを実施しにくい点などもみられた (No.6)。

また、自分が確認した情報をペアの学生も患者に聞いていたなど、事前に確認しておかないとケアが重なる (No.3) ことや、事前に役割分担を決めて

おかないと息が合わず混乱する。即時の決定を求められる場面で、話し合いにもたつきタイミングを逃すことや、突発的な場面で臨機応変に意思疎通を行い判断することが難しい (No.6, 7) といった課題も感じていた。さらに、自分が得た情報をどこまで共有すべきか、学生間で気になる点も異なるため共有が難しい (No.7) という、相互の考えや視点の異なりの中でのすり合わせに難しさを感じていた。

〔学習機会が減少することへの懸念〕では、患者と関わる機会やコミュニケーション機会が少なくなるのではと感じていること (No.6, 7) や、看護技術経験の回数が減ることに対しても学生は懸念していた (No.3, 6, 7)。同時に、指導者や教員から指導を受ける機会や時間が短くなる可能性や個々で受けられる指導機会が減るのではないかと懸念や、2人で1人分の指導時間であるという感覚を学生はもっていた (No.6, 7)。

また、2人で分担した情報収集では、自分が期待した情報が得られないことや、個々学生のライフスタイルが異なるため実習時間外で情報共有時間の確保が難しいという〔情報共有時間の確保が難しい〕ことがペア実習での学生の課題として示された (No.6, 7)。

4. 指導者が捉えたペア実習の効果と指導上の課題・工夫 (表4)

実習指導者や教員 (以下：指導者) を対象とした3文献を分析した結果、関わりに困難が生じても2人で工夫や取り組みが行えること (No.10) や、分担・協力しながらケアが考えられ、幅広いアプローチができること、また学習内容や患者に対する気付き (No.11) など〔補完しあうことで学習や支援の幅が広がる〕ことが示されていた。

また、自分の行ったケアをペアの学生にもわかるように状況説明するなかで、思考が整理されることや、他の学生の行ったケアを見学したのちに一緒に振り返るなかで、患者の反応を含めた場面の客観視ができ、気付きも深まるという (No.11) 〔客観視で気付きが深まる〕という効果を感じていた。

指導者が捉えた課題では、一方の学生の学習が進んでいるとペア学生も実践できていると判断してし

表4 指導者が捉えたペア受持ち実習での効果と課題および指導における工夫

テーマ	内容	該当文献番号
指導者が捉えた効果	〔補完しあうことで学習や支援の幅が広がる〕	⑩⑪
	〔客観視で気づきが深まる〕	⑪
指導者が捉えた課題	〔学習状況やケアの方向性の異なりに対する指導困難〕	⑪
	〔状況に応じたペア継続判断への戸惑い〕	⑪⑫
	〔学生間の関係性への対処とタイミングの難しさ〕	⑩⑪⑫
指導の工夫	〔機会の公平性〕	⑪
	〔理解度や考えを多角的に判断する〕	⑪
	〔患者の負担にならない配慮〕	⑩
	〔相互尊重できる関係の構築〕	⑪

まう、どこまでが個別学習なのかがわかりにくい点や、それぞれの学生によって捉え方が違うときや、ケアの方向性が異なる際の指導について迷うといった(No.11)〔学習状況やケアの方向性の異なりに対する指導困難〕が生じていた。また、小児看護学実習の急性期にある子どもは体調が不安定だけでなく機嫌も悪い、母親も余裕がないことが多く、2名では負担が大きいと感じることや(No.11)、関係性の悪い学生で実習を進めることが本当に患者にとって良いことかどうか(No.12)という〔状況に応じたペア継続判断への戸惑い〕があった。また、学生間の関係性についても関係がうまくいっていないときや、どこまで一緒に考えさせるのか、話し合う関係への介入の程度(No.10, 11, 12)という〔学生間の関係性への対処とタイミングの難しさ〕がみられていた。

指導者が、ペア実習で実践している、あるいは心掛けている工夫として、学生個別の記録を確認することや個々に質問をすることで(No.11)〔理解度や考えを多角的に判断する〕ことを行っていた。また、技術経験や指導が公平になるよう心掛ける(No.11)という〔機会の公平性〕を常に心がけていた。また、患者の病状や学生状況に応じては、訪室のタイミングを計ることや、看護師自身の関わり方から学びを広げてもらう(No.10)など〔患者の負担にならない配慮〕を行っていた。さらに学びを深めるために、学生間だけではなく、指導者も一緒にケアを考える、個々の学生を尊重する、ペア学生

と一緒に考えるように促す(No.11)といった〔相互尊重できる関係の構築〕を心掛けていた。

また、ペア実習の指導マニュアルを作成・導入することで、病棟メンバーにもペア実習について理解してもらえた(No.12)ことも学生の指導に役立つ工夫の一助となっていた。

V. 考察

1. 学生が捉えたペア実習がもたらす効果と課題

学生が捉えたペア実習がもたらす効果として、〔検討を重ねることでケアの質が向上する〕〔対象理解のための知識の深まりと視点の広がり〕〔学習に対するモチベーションの向上〕〔実習に臨む精神的負担の軽減と安心感〕〔グループ内での関係性の深まり〕〔指導者・教員との関係性が築きやすい〕の6つの効果が示された。

学習者同士が相互に協力しながら学びあう学習手法のことをピア・ラーニングといい、同じような立場の仲間とともに支えあいながら、知識やスキルを身につけていくこと(伊藤他, 2013)とも位置付けられ、教育方法として多く導入されている。ピア・ラーニングは、協働して役割を遂行することで、学習者が主体的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」に繋がると考えられている。今回のペア実習も、1人の患者への最善のケアを学生2人で検討していく過程を通して、〔検討を重ねることでケアの質が向上する〕といった相互の学びの深まりに繋がっていたものと考えられる。看護学部の異なる学年間での

講義科目におけるピア・ラーニングの研究によると、ピア・ラーニングの導入によって、学生は、学習スキル、批判的思考と問題解決能力、コミュニケーションスキルが向上し、学習意欲を高めると共に、責任感が身に付いたことが報告されていた (Loke et al., 2007)。今回の結果においてもこれら研究と同様に、ペアの学生の患者との関わり方の考察から、自己のコミュニケーションスタイルや技術、関わりを客観視する他者から学ぶ姿勢や、ペア学生の実習姿勢が学べることで、〔対象理解のための知識の深まりと視点の広がり〕に繋がっていたと考える。小児看護学実習では、疾患をもち、辛い状況の子どもと関わることに戸惑いを生じる困難がみられることが報告されており (小代他, 2010)、子どもと接する機会の少なさから、実習での学習以前に、関わりに困難を生じることも考えられる。また、老年看護学実習においても8割の学生が、高齢者の特徴の理解、話しかけても反応がない状況や認知症高齢者とのコミュニケーションなどに困難感を生じていた (福田他, 2011; 中川他, 2019)。ペア実習では、一方の学生の患者への関わり方からの学びや (No.3, 5, 6, 7, 8, 9)、ケアの際、相互で協力することで、対象となる患者の反応を客観視できる余裕をもてる状況 (No.3, 6) に繋がり、学生個々の観察力や思考の幅が広がるものとする。

同時に、対象理解や関わりに困難を生じる実習状況においてもペア学生が存在することで、心理的支えや支援方法や看護過程の学習の相談ができる心強さが得られ (No.3, 5, 7, 8) 〔実習に臨む精神的負担の軽減と安心感〕に繋がると考えられる。さらに、学生間での安心感を得たことが、後押しとなり、相手に迷惑をかけないように予習する、ペアの学習状況や良い所を確認して励みにする (No.3, 6, 7) というペアの学生に対する責任感も生じ、〔学習に対するモチベーションの向上〕に繋がっていたものとする。

学生が捉えた課題では、ペア実習のなかでの情報収集では、自分が期待した患者の情報が得られないことや学生間の生活時間の異なりなどから生じる (No.6, 7) 〔情報共有時間の確保が難しい〕とい

う物理的な課題が生じていた。また、相手の意見や思考に引っ張られて甘えること (No.7, 8) から〔主体性の低下〕が生じることや、関係性の構築に試行錯誤して意見の言いづらさ (No.7, 8) や相手に対する不満 (No.3) が〔学生間関係性構築の難しさ〕という課題となっていた。さらに、自分の意見が言えて相手の意見も取り入れるバランスの難しさを感じる (No.5)、こだわりや慣れた方法でケアを実施しにくい (No.6) という〔異なる考えや援助方法調整の難しさ〕もみられていた。前述したピア・ラーニングにおけるネガティブな側面として、時間確保の問題、学習における受動的態度、学習者間の個人及び学習スタイルの不一致、チューターの不十分な知識が報告されている (Loke et al., 2007)。今回の学生の捉えた課題についても同様な課題が生じていた。

以上の課題を踏まえ、自己の考える看護について十分にペア学生に伝えられる時間を実習のなかで設け〔情報共有時間の確保が難しい〕状況を改善することが必要である。それとともに、学内での学生の性格や状況を把握できる立場にある教員は、特に、学生間関係性に注意を払い、臨床指導者と情報を共有しながら関係性の調整を継続して、学習面への影響を最小限にすることの必要性が示唆された。

2. 指導者が捉えた効果と課題・工夫

指導者が捉えた効果としては、〔補完しあうことで学習や支援の幅が広がる〕ことや〔客観視で気づきが深まる〕といった、支援や学習の視点の広がりをペア実習の効果と捉えていた。一方で、〔学習状況やケアの方向性の異なりに対する指導困難〕という2人の学生への個別性を考慮した指導に苦慮していた。それらに対し、個別の実習記録を確認することや個々に質問をすることで到達度や理解度を把握し、指導に生かす (No.11) といった〔理解度や考えを多角的に判断する〕指導の工夫を実践していた。一方で、学生は、周囲からペアの学生と比較されると気かけ、不安に思うことや (No.3, 5, 6, 7)、ペア学生のアセスメントや記録物などの学習成果物、関わり方に関する状況が見えることで、自分が劣っている部分が気になる、劣等感を感じてしまう

(No.6) など〔比較されることを気にする〕ことを課題として捉えていた。指導者は、個別での指導の際には、学生個々に強みを伝えることや、できている点のフィードバックを行っていくことも必要であると考えた。また、学生は、関わる機会やコミュニケーション機会が少なくなること (No.6, 7)、看護技術経験の回数が減ること (No.3, 6, 7)、2人で1人分の指導時間という感覚で、指導機会や時間が短くなること (No.6, 7) という〔学習機会が減少することへの懸念〕を課題として捉えていた。一方で、指導者は、技術経験や指導が公平になる (No.11) という〔機会の公平性〕を心掛けていた。

学生相互に知識や技術を補完しあいながら対象者へのケアが実践できる〔補完しあうことで学習や支援の幅が広がる〕というペア実習の利点や、個別に指導の相談が行える点等〔機会の公平性〕も実習開始時に十分に説明することで、学生のもつ心理的負担を減らすことにも繋がると考える。

さらに、学生自身は、ペア学生と2人で訪室時に患者が戸惑っていたこと (No.3)、限られた病室スペースへの訪室で患者や家族が圧迫感を感じることを懸念 (No.6, 7) することといった〔患者に対する気遣い〕を課題として捉えていた。指導者は、患者の病状や学生状況に応じては、訪室のタイミングを計ることや、患者の病状に応じた看護師自身の関わり方から学びを広げてもらうなど (No.10) 〔患者の負担にならない配慮〕を工夫として行っていた。学生の患者に対する気遣いは学生自身が捉えた課題ではあるが、医療者として患者に対する必要となる気遣いでもある。それら学生の気遣いを、病状や状況に配慮した支援に発展させるために、看護場面の教材としていくことも必要であると考えた。そのため、担当患者を決定する際には、個々学生間の学習目標を臨床指導者と教員間で相談・共有しながら、目標に相応しい、患者選択が望まれる。

さらに、指導者からペア実習の指導マニュアルを導入することで、病棟メンバーにもペア実習について理解してもらえたこと (No.12) が、学生指導の一助となっていたと示されていた。中村ら (2014) の調査によると、学生は臨床指導者だけでなく病室

担当の看護師も指導してくれ、辛さを理解するひと言をかけてくれることで、受け入れられていると感じていた。また、学生の学びを臨床指導者と教員が共有することで、学びが深まり、実習がスムーズに進むと感じていた。学生が実習から多くの学びを得ていくためには、教員と臨床指導者だけに留まらず、病棟スタッフともペア実習の方法を共有して、指導に関わることのできる環境調整を継続していく必要がある。

3. 看護学臨地実習におけるペア実習の導入・活用に向けての検討

今回の結果では、分析対象文献12文献のうち9文献が小児看護学領域でのペア実習を取り上げた文献であった。日本の15歳未満人口は1465万人、41年連続の減少で、総人口に占める割合は11.7%で、48年連続で低下している (総務省, 2022)。また、都道府県間に差があるものの、15歳未満の入院受療率は減少しており、昭和59年を1とみなした場合、平成29年では入院患者は0.4まで減少し、病院小児科は集約化が進んできている (厚生労働省, 2020)。これらの背景の中、看護系大学の増加に伴い、小児看護学領域に限らず、出産数の減少がみられている母性看護学領域など、領域によっては実習施設や病棟への学生受入れ人数が限定されていることも推測される。同時に、小児看護学領域においては、小児科の集約化によって入院施設をもつ病院に入院する子どもの病状も重症化が予測され、結果、受け持てる子どもの人数や疾患にも影響を与えていることも推測される。それらが、今回のペア実習を実施している領域や報告論文数に影響を与えたものと考えられる。

2020年春以降、新型コロナウイルス感染症の影響によって、臨地実習の中止や、受入れ学生数の縮小、実習時間の短縮など、実習体制や内容の変更を余儀なくされている。各学校では、臨地実習に代わる学内演習やオンライン実習等の工夫を取り入れ、臨地の場面に近づけた学びの機会を提供し、目標達成や学生の満足感も得られていることが報告されている (萩原, 2022; 木下他, 2022)。一方で、オンライン実習では、コミュニケーションや状況設定の

理解の困難といった課題も示されている(黒河内他, 2022)。緊急事態宣言下の2020年に入学した学生のなかには、臨地での基礎看護学実習を経験できず、各論実習である領域実習が臨地での初回実習となることも予測される。また、オンライン講義や限られた登校日数のなかで学生同士のコミュニケーション機会も減少していることが予測され、患者と関わる実習においては、高い緊張感と関係性構築に時間が必要と思われる。本来であれば1人の対象者との関係性の構築から看護問題を抽出し、ケアを立案、看護実践を行うといった一連の看護過程の展開を実習において実践力の向上にも繋がりを望ましいと考える。しかし、特に、子どもや高齢者では、前述したような関わりに困難を生じる可能性もある。学生の実習における達成感を高める要因として、患者の回復、患者とのコミュニケーション、看護過程の展開が効率よく進められた、気持ちをメンバーに理解してもらえたという項目が報告されている(井城他, 2016)。限られた実習期間での対象理解が難しいと推測される領域においては、実習展開方法のひとつとして導入可能性を探っていくことも必要であると考える。

一方で、先行研究において、受け持ち患者相互の目標や支援を学生間で助言、検討しあう小児看護学実習ミニカンファレンスにおいて、年齢に応じた関わり方への不安や疾患理解が不十分な実習開始段階では、学生は積極的にカンファレンスを活用するが、後半になるとカンファレンスへの参加より患者との関わりを優先したい思いが強くなっていた(山崎他, 2019)。ペア実習においても、領域実習を重ねていくなかで、患者との関わりや看護過程の展開など、学生個々で学びの優先順位も変化してくるものと考えられる。そのため、実習に臨む学生の準備性を考慮しながら、半年以上におよぶ領域実習のはじまりの段階においてペア実習を導入するなど、導入時期の検討も必要であると考える。

VI. 結論

学生が捉えたペア実習がもたらす効果として6つが示された。それら6つは、『学習効果』『心理的効果』『副次的効果』に大別された。また、学生が捉えたペア実習の課題は、7つの課題が示され、『学生の内面に生じる課題』と『実習形態から生じる課題』に大別された。

指導者は、ペア実習の際に〔理解度や考えを多角的に判断する〕〔機会の公平性〕を常に心がけ、同時に〔患者の負担にならない配慮〕を行っていた。さらに指導者も含めた〔相互尊重できる関係〕の構築にも配慮していた。

VII. 研究における限界

今回の研究では、ペア実習に関連する論文数12文献と少なく、また、分析した文献のうち9文献は小児看護学領域における文献であった。そのため、看護学臨地実習の全ての領域に共通するペア実習の効果と課題を十分に反映したものとは言い難い。今後はさらに、領域間での違いなど比較しながら分析を進めていきたいと考えている。

利益相反

本研究において利益相反は存在しない。

文献

- 福田峰子, 安藤好枝, 田中和奈, 他 (2011): 老年看護学臨地実習における学生の困難状況と対処行動(第一報) 実習初期における困難状況の実態, 中部大学生命健康科学研究紀要, 8, 91-105.
- Garrard J, 安部陽子(訳) (2012): 看護研究のための文献レビュー マトリックス方式, 医学書院, 東京.
- 萩原智子 (2022): 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)禍における成人看護学実習(慢性期)の展開 オンライン実習の構築と実践報告, 産業医科大学雑誌, 44(1), 91-100.
- 石川恵子, 内海桃絵 (2015): 看護学生における臨地実習へのモチベーション, 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要 健康科学, 11, 11-16.
- 井城瑠衣, 曾我菜々美, 田中玲奈, 他 (2016): 臨地実習における看護学生の経験と達成感との関連, 富山大学看護

- 学会誌, 15(2), 145-154.
- 伊藤崇達, 中谷素之 (2013): ピア・ラーニング学び愛の心理学, 1-10, 金子書房, 東京.
- 鎌田由美子 (2016): 精神看護学実習における学生の対人関係構築に関する学び, 日本看護学会論文集看護教育, 43-46.
- 木下真吾, 山本浩子, 中村もとゑ, 他 (2022): COVID-19感染拡大に伴う老年看護学実習におけるICT活用の取り組み, 日本赤十字広島看護大学紀要, 2221-2227.
- 黒河内仙奈, 間瀬由記, 安藤里恵 (2022): コロナ禍においてオンラインシステムを導入した高齢者看護学実習の評価と課題—学生による事後アンケートの分析から, 神奈川県立保健福祉大学誌, 19(1), 95-109.
- 厚生労働省 (2019): 看護基礎教育検討会報告書 (令和元年10月15日), <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (閲覧日2022.10.23)
- 厚生労働省 (2020): 第17回 医療計画の見直し等に関する検討会 資料1-2 小児医療について (令和2年1月15日), <https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000584472.pdf> (閲覧日2022.12.12)
- Loke AJ, Chow FL (2007): Learning partnership—the experience of peer tutoring among nursing students: A qualitative study, *International Journal of Nursing Studies*, 44, 237-244.
- 文部科学省 (2002): 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて 看護学教育の在り方に関する検討会報告 (平成14年3月26日), https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm (閲覧日2022.10.23)
- 文部科学省 (2017): 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～ (平成29年10月), 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (閲覧日2022.10.23)
- 中川孝子, 熊谷和可子, 木村ゆかり (2019) 高齢者施設における老年看護学実習での学生の困難感に関する実態調査, 青森中央学院大学研究紀要, 30, 53-60.
- 中村伸枝, 竹中沙織, 仲井あや, 他 (2014): 学生の看護実習を通じた学びの特徴と大学教員と臨床指導者の連携・協働のあり方, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 36, 21-26.
- 小代仁美, 植木野裕美 (2010): 小児看護学実習において看護学生がこどもと関わることを躊躇させる影響要因, 日本看護研究学会雑誌, 33(2), 69-76.
- 総務省 (2022): 統計トピックス No.131 我が国のこどもの数—「こどもの日」にちなんで—「人口推計」から (令和4年5月4日), <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/topics/pdf/topics131.pdf> (閲覧日2022.12.12)
- 山崎 歩, 齊藤志織 (2019): 小児看護学臨地実習で実施する個人目標共有カンファレンスがもたらす効果と課題, 日本小児看護学会誌, 28, 87-94.